

「峰はみな しずもり

梢に 風の そよぎなく

小鳥は森に 深くもだす

待て しばし

やがて おまえも憩えよう」

——ヨハン・ウオルフガング・フォン・ゲーテ

『旅びとの夜の歌』(「山々の頂に」)より

「人と人とは点である」といったようなフレーズを聞いたことがある。真っ白な紙の上に散りばめられたそれら無数の点たちは、ある点と点は線を浮き上がらせ、また別の点とつながって様々な模様を描き出すというのだ。つまりそれがネットワークであり、人間社会というものなのだろう。紙の上のある部分ではいびつな円を描いているかもしれないし、またある所では複雑な螺旋形状を描き出しているのかもしれない。でもそれは端から見たと時の話で、僕には誰がどのようにして生き、過去はおろか今現在考えていることすら知る術を持っていなかった。誰かと誰かがいて、その間のスペースに「僕」という点があるらしい、ということしか分からない。その判断も突き詰めて考えてみれば怪しいと言わざるをえない。

僕がうつ病で苦しんでいた頃、毎週聴いていたラジオ番組があった。リサという名のバイリンガルのパーソナリティが毎週テーマを用意し、二時間リスナーからのFAX、Eメール、そして流行りの洋楽で進んでいくという、シンプルな成り立ちの心地よい番組であった。実際、僕がその番組を見つけてから三ヶ月もしないうちに終了してしまったのだが、その間の何週間か、火曜の深夜だけはイヤードの外れたヘッドフォンを着け、チャンネルを合わせていた。聴き始めて二回目のときに、初めてメールを送った。内容は忘れたが、「気に入った、これからも聴きます」といったようなごくごく平凡なものだったと思う。それから番組が終了するまで毎回、二時間の中で二通ほど送り、リサの頭の中にも名前ぐらいは残ったかもしれない。番組の中で彼女

は僕の送ったメールを二十分ぐらい経ってから読み上げた。気が滅入っているときは励ましの言葉を述べ、「私でよかったら相談にのるよ」とも言ってくれた（僕がうつを患っていることはすでに伝えていた）。当時まだ高校生で、ある意味において若すぎた僕は半心うれしいと思ったが、すぐに、まあ仕事だからな、という思いが頭の中を占めた。彼女の言葉が本心なのか、それとも（嘘でないにしろ）ビジネスフェイスゆえのコメントに過ぎないのか、僕には知る由もなかった。

事実、それ以後彼女からの連絡はない。つまり僕と彼女、リサとは線にはなれなかったわけだ。

真つ白な紙の上には無数の点が散らばっている。僕はその紙を眺めながら、果たして本当にこの世界に線などあるのだろうか、と自問せずにはいられなかった。

今まで僕が出会った人はそれなりの数にのぼるだろうが、すべてがリサのように、近づいて来たとしたら、僕の十メートル先を通り過ぎて行ってしまった。その繰り返しだ。そういう中で笑っているやつらは、とんでもなく馬鹿な、身の程をわきまえていないギャンブラーのように見えた。少なくともあの時代の僕には。

「やってみなきや分らないでしょ」

反吐を吐きたくなるような笑みを浮かべながら、通りの脇に座り込んだ僕を見下ろしながら声をかける者もいた。

「それで、」と僕は心の中で言った。

「君は見つけられたのかい？」

目を上げるともうそこには誰もいなかった。ただ、限りなく透明な風が音もなく、僕の高くない鼻をかすめていった。

風は去り際にこう言った。

「あなたは風に揺られ、そして死ぬのよ」

僕は風にもてあそばされる木の葉のように舞い、そして死ぬのだ。

V.O.X.

きれいなステンドグラスは

なぜか曇って光が射してこない

手でこすってみても夢は見えない

空を見上げて何年待ってみても

何も降って来やしない

2

僕の名はクロノという。ハンドルネームだ。本名のほうは家族から呼ばれるときと、ダイレクトメールが届いたときに顔を出すぐらいのものだ。僕の仲間は皆、クロノと呼ぶ。

僕は常にドアを目の前にして立ちすくんでいる。すべて真つ白な空間だ。ドアを開ける。すると、三メートル先にはまたドアがある。その繰り返しだ。どれが入り口でどちらが出口かなんて分かるはずもない。ただそこには僕の前にドアがあり、後ろにドアがある。ひとつの白い空間にふたつのドアノブ。この世界には（少なくとも今僕が生きている世界は）単純な反復作業によって成り立っていた。

僕は歩き続ける。何故？ そこにはそれしかないからだ。ドアを開ける。三メートル先にドアがある。開ける。歩く。開ける。歩く。開ける。そのエンドレス・リピート。限りのないデジャ・ヴュ。過去と現在と未来の融合。

新たなノブを握ったその時、僕の目の前で、汚れひとつなく、慈愛に満ちた微笑みをたたえた天使は僕にこう告げた。

「あなたは風に揺られ、そして死ぬのよ」

そして僕はそのドアを開けた。

3

「ふう……」

暑苦しい部屋で目が覚めた。太陽はとっくに昇っている。幸か不幸か陽当たりが良すぎるんだ、この部屋は。俺の名はタツ。いわゆる路上アーティスト。しかしそれによる現金収入は少なく、とりあえずフリーターとして働きながら生活している。

しかしこの夏の初め、転機が訪れた。大手のレーベルから声がかかったのだ。路上からメジャーデビューするアーティストはこの頃、特に珍しいことではない。とは言ってもその道は険しく、やはり自分の場合、ラッキーだったと言えるだろう。本来な

らばここで歓喜の声を上げるかもしれない。でもなぜか俺はその気にはならず、とりあえず時間が欲しい、とすぐには返答しなかった。そしてこの夏を迎えた。
なぜ俺は悩んでいるのだろうか？ 何か引かかっている。その何かが分からない。そうしているうちに時間だけが過ぎていく。

俺は何を求めているのだ？ 自分で自分のことが分からない、それがひどく自分を苛立たせる。

V.O.X.

もうずいぶん長いことこうしているような気がする
宙ぶらりんのブランコみたく
同じ場所を行ったり来たり
そうしていても何も見つかからないのに

指を伸ばし
空間をさまよい
過去に溺れる

……それでも生きる広漠とした日々

やっと誰か来て声をかけたら
ふわりふわりと笑みを浮かべて消えてしまった

蒼い空 白い雲 南風 鳥の声 木々のざわめき 果てしないイメージ……
どこかで見たようなシーンの繰り返し
歩けど歩けど景色は変わらず
振り返っても 風が足跡も何もかもみんな消し去る

何か光ったと思ったから歩み寄ったのに
さらりさらりと風に溶けて消えてしまった

指を絡ませ
空間と融和し

過去を殺す

……それでも生きる荒涼とした日々

たまたら紙に向かって吐き出す。その他に今の自分にできることに何がある？

4

あたしの名前はミュ。母には半分白人の血が流れているから、あたしの瞳は少し青みがかっているし、髪はカフェ・オ・レみたいな色。

友だちのタツとクロノとは大の仲良し。ふたりとも大学のサークル、「エデニズム」で知り合った。もちろんそれは造語なのだけど、簡単に言えば、ごみ拾いのサークル。少し詳しく言えば、この地球をきれいにしよう、エデンのように、ということ。そしてまずは身の周りから始めようじゃないか、ということ。大学構内はもちろんのこと、街なかや、ときには少し遠出して鎌倉とかの海にも行ったりする。あたしは砂浜でごみを拾っていて、ある時ふと後ろを振り返る、その瞬間がとても好き。

あたしは来年の春、卒業する予定。一個上のタツはもう昨年度で卒業した。唄ってばかりだったからギリギリだったらしいけど。同い年のクロノは夏休み前に自主退学した。理由は訊いても教えてくれない。でもクロノは他に何かやりたいことがあったのかもしれない。もしかしたらやりたくないことだったから辞めただけなのかもしれない。それは分からないけれど、彼はかく生きることでできる人ではないから、そのことで心配はしてないのだけ。

ただ、彼、クロノに関しては、あたしには少し特別な想いがある。好きとか嫌いとか、そういう種類のものではなくて。確かなものでもないし、そうそう簡単に口にすることもできない。だから彼とふたりきりになると、あたしはひどく胸が苦しくなる。恋とはまったく違う種類の痛み。

今は学生最後の夏休み。この夏はクロノの家にタツとふたりでおじやまさせてもらうことになってる。めいっばい楽しむつもり。そしてできれば、ベルリンの壁のような自分の心の壁に穴を開けてみたいとも思う。どうなるか、まるで予想もつかないけれど。

ゆらゆら揺れるこの気持ち

あなたにも届かないこの想いは

今は宝箱にしまっておきましょう

いつか陽の下に出してあげるから……

「デビュー？」

「まだ決めたわけじゃないよ」タツは落ち着いた口調でさらりと言った。

「でもすごいじゃない。メジャーデビューだなんて。プロになるってことですよ？」

床にビールの空き缶が何かを象徴するかのよう^に四本積み上げられている。ミュはひとりウエルチのグレイプジュースを飲んでいる。ミュは酒にはめつきり弱いらしい。今までアルコール関係を飲んでいるところを見たことがない。いつか、「ビールぐらいなら平気じゃないの？」と訊いたら、「げっ、ぶが出るのがイヤなの」と言った。もつともな意見だ。国連総会でも通用するレヴェルの説得力だ。「我々はビールを飲むとげっ、ぶが出るので、それを拒否する！」……うん、悪くないと思う。

「それはそうなんだけどね。だけど、クロノは知ってると思うけど、俺は音楽で食っていくために唄い始めたわけじゃないんだ」

「でも才能があつたってことでしょ？ それを生かさないとと思うけどな」

「まあ……そうかもしれない」

「何が引っかかっている？」彼には考えているとき、下唇を噛む癖があつた。

「そのうち話す……と思う」

「うん、まだ時間はあるんだろう？」

「一応この夏いっぱいまで」

「早く気持ちちがまとまるといいね」

タツの話はこのときはここまでだった。次いでつまみになったのは先月ボーイフレンドと別れたミュだった。結局記憶がなくなるまで、積み上げられた空き缶が何を象徴しているのか分からなかった。もしかしたら記憶がなくなったあとに分かったのかもしれないが、それはつまり分からなかったに等しい。

……人生？

まさか。